

思考の庭のつくりかた

はじめての人文学ガイド

福嶋亮大

一生ものの教養

を手に入れるための、

人文学入門書の決定版!

サントリー学芸賞受賞の批評家であり、立教大学文学部准教授が教える、

あなたの〈考える心〉をセットアップする
人文学の歩き方!

読書

批評

言葉

近代

歴史

芸術

思考の庭のつくりかた

はじめての人文学ガイド

福嶋亮大

星海社

221



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに —— 考える心のセットアップ

人文知への招待

本書の狙いは、読者を「人文知」、つまりいわゆる文系の学び方や考え方に招待することです。文化や芸術が好きで、深く作品を楽しめるようになりたい。人文書や哲学書を使って、世界の物事を鋭く捉えてみたい。でも、ちゃんとした教養を得るのは難しそう——そういう若い読者のために、人文知の山に登るコツや基礎知識をこれから紹介していこうと思います。あるいは、文系の学問がいったいどういう仕事をしているのか、理系的な思考との違いは何か——このような基礎的な疑問をもつ読者に対しても、それなりに筋の通った知識を提供していくつもりです。

そもそも、人文知らないし人文学とは何でしょうか。明確に定義するのは実はなかなか難しいのですが、ここでは「主にテキストを解読しながら思考を組織化し、人間さらには人間の生み出したものについて研究する営み」と言い表しておきます。大学受験的な勉強で

はその「思考の組織化」はもっぱら権威や受験テクニクに依存していますが、大学の文系の学問ではそれを自律的・自発的にやることになります。ただ、そのために、いきなり思考のフィールドが拡大して戸惑うケースも多いのです。

むろん、文系の学問と言っても多様ですから、テキスト「だけ」を頼りにしてはうまくいかないケースも多々あります。人類学や民俗学のように、文字資料に記録されない習慣や民間伝承を研究するため、フィールドワークを重視する学問もありますし、一部の社会科学のように数式や統計をベースに組み立てられた学問もある。でも、それらの学問でもやはり、テキストを読む体験がその根底にあります。民俗学のパイオニア柳田國男やなぎたくにおにせよ、社会科学の巨匠マックス・ヴェーバーにせよ、ものすごい読書家であり、かつ超人的な量のテキストを書き残した学者でした。

では、なぜ「テキストの解読」という迂回路を通って、思考を組織化するのでしょうか。おおざっぱに言えば、それが「ものの見方や考え方を更新する」ために必要な技法だからです。もう一步進んで言えば、それは人間をより多面的に理解し、人生をよりよく仕立てるための知恵でもあります。でも、これでは一般論にすぎませんから、本書でその内実を詳しく説明していこうと思います。

「目詰まり」をとるために

日本の大学ないし大学生の知的レベルが下がっているという意見は、しばしば見かけます。文学部の一教員である僕も、そういう印象を抱くことがないとは言えません。とはいえ、本務校（立教大学）の学生たちと日々接していると、そこまで悲観的な気持ちにならないことも確かです。

むろん、個人差は大きい。やはり冴えない学生はいます。強い進学動機はなく、かなり消極的な理由で文系を選んだケースもある。それでも彼らには総じて、ものごとを深いレベルで知りたいという向学心はある。文学や哲学のテキストをもとに、友人と会話するのが楽しい、という気持ちもある。ちゃんと手ほどきすれば、プロ顔負けの卒業論文を書く学生もいる。センスの良い詩や絵本を書けたりもする。要するに、彼らは人文知への志向性を、十分に備えているように思います。

ただ、人文学や批評に「深入り」するのを無意識に避けようとする態度も、ふとした会話から感じることがあります。結局、おおもとのところで人文的な学問にうつつすらとした疑念や不明点があり、それが本格的な没入を妨げているのではないか。より不幸なケースだと、広く浅く科目を履修したはいいものの、結局何を学んだのか、実感の薄いまま卒業

してしまう文系学生もやはり全国にいるはずですが、でも、それは残念だしもったいないから、何とか学生の意識の方向づけを変えられないだろうか。そう思うことが最近増えました。

いわゆる「人文知」が何となく敬遠されることには、いくつかの要因があるでしょう。ただ、それはたぶん深遠な理由というよりは、修正する機会がなかった小さな偏見の積み重ねにすぎないのではないかと僕は考えています。学生には潜在的な能力も意欲もあるのだから、ちゃんとしたオリエンテーションがあれば、人文的に考えることをもっと自由に気兼ねなく楽しめるはずですよ。

本書でやろうとするのは、ちょっととした思考の「目詰まり」を除去して、人文学や批評に対する食わず嫌いを少しでも減らすことです。いったんその分野をスムーズに受け入れ始めれば、今の学生は十分に自力で成長できる。だからこそ、最初の「押し」が以前にもまして重要になっているように思えます。

引っかかるポイントは誰しもさほど変わらない

そういうわけで、本書は主に二〇代の読者を念頭に置いています。と同時に、本書の内

容は社会人にとつても、ある程度興味深く読んでもらえるはずで、なぜでしょうか。

かつて政治学者の丸山眞男まるやままさおは、だいたいこういうことを指摘しました。日本人の知的好奇心は非常に高く、マルクスやニーチエの難解な哲学書が何万部も売れたりする。これはヨーロッパ人からしても驚きである。しかし、その読者の主力は一〇代や二〇代であり、社会人にまでなかなか浸透しない。たいていの日本人は大学を卒業すると同時に、学問や教養からも卒業してしまつて、あとは「職場の技術的な知識への関心に埋没」することになる。そのため、大学の学問や教養はせいぜい「若者文化」にとどまり、世代を超えた伝統として蓄積されていかない……。

今の一〇代や二〇代はそれほど本を買わないでしょうから、そこは丸山の時代とは違います。ただ、特に文系の場合、大学卒業と同時に学問まで卒業してしまふという傾向は、今もたいして変わらないでしょう。日本で社会人になるとは、大学の学問を忘れることと実質的に同じなのです。

そのため「学生に分からないことは、実はたいして社会人にも分からない」ということになります。引っかかるポイントはどの世代でもたいして変わらない。なぜなら、社会人は「職場の技術的な知識」を増やすのに忙しく、普遍的な教養の習得にまで手が回らない

からです。

実学に限界があるのは常識

もつとも、最近ではそのことへの反省も広まっています。例えば『教養としての〇〇』というタイプの社会人向けの本——質が高いかは別として——が量産されているのは、そのあらわれです。僕自身、財界の方から「日本企業が技術ではなく、価値観のレベルで闘うにはどうすればよいか」という趣旨の問いを投げかけられることが増えました。気候変動問題や人権問題を典型として、グローバル経済のゲームで生き残るには、価値観のレベルを鍛えないと難しいからでしょう。

近年は「文学部不要論」が巷ちまたをにぎわせた時期もあります。むろん、そういう論調もまだ一部にあるかもしれませんが、僕はそれが多数派になるとはまったく思いません。今後の社会のあり方を探ろうとするとき、いわゆる「実学」だけでは限界があることは、財界においても政界においても、目端が利く人間にとつてはすでに常識でしょう。それゆえ「人文学だの芸術だの歴史だの、意味あるの？」と言って斜に構えている若者は、大局が見えていません。少なくとも、人文的なコミュニケーションや普遍的な教養をインストールし

ておくことは、人生において決して損にはならない。それは大学を卒業した後も、一生使えるからです。

それゆえ、本書はひとまず若い読者に向けて書かれているものの、実際には老若男女を問わず、誰にでも関心をもってもらえるテーマを並べているつもりです。例えば、これらの問いにどう答えるべきでしょうか。

- ・ 批評は何のためにあるのか。批評家は作品を高めから見下ろし、作家の考えを無視して、自分の意見を押しつけているだけではないか。

- ・ 近代とはどういう時代なのか。アイデンティティや自由・民主というテーマをどう捉えればよいか。

- ・ 歴史を学ぶとき、何をどの程度知るべきなのか。そもそも、歴史はなぜ必要なのか。

- ・ 芸術はどんな仕事をしているのか。娯楽と何が違うのか。現代のメディア環境はアーティストにどのような変化をもたらすのか。

これらは素朴な疑問ですが、人文系の学者だからといって、すんなり答えられるとは限

りません。というより、素朴な問いほど実は答えにくく、答える側の力量が試されるものです。素朴にして難しいテーマはやはり素通りせずに、折に触れて何度も再考されねばなりません。本書はまさにこれらの問いに対する、一種の「中間報告」として書かれたものです。

考えるヒント

本書の構成を説明しておきましょう。前半の三章は「読むこと」「書くこと」「考えること」「話すこと」という基本的なテーマについて、僕なりの読書術や思考術を紹介しながら、人文的な観点から説明したものです。

なぜこのようなテーマから始めるのか。それは人文学や批評においては、思考のプロセスは「読むこと」と「書くこと」によって成り立つからです。他者のテキストを解読しながら、それに接続するようにして新たなテキストを自分で生産し、また他者のテキストへと戻る——この読み・書きの往復運動がすべての基本です。この運動がうまくいかない、人文的な教養にもアクセスしにくくなってしまふ。それゆえ、知的生産がスムーズに進むように、技術面での工夫を語るのが、本書の前半の趣旨です。

後半の三章では「近代」「歴史」「芸術」という三つのテーマを立てて、それらに向きあうときの基本的な考え方を示しました（本来はさらに政治やテクノロジーについても書く予定でしたが、紙幅の関係で割愛しました）。これらのテーマはふつうに書くときと重厚長大な文明論になってしまいましたが、むしろ僕としては記述の軽快さを心がけ、二一世紀の人間として、最低限知っておくとよいことを示したつもりです。

実際、思考の目詰まりをとるには、いかめしい学術的著作よりも、断片的な言葉のほうが役立つことも多いのです。ちょっとした言葉の切れ端が突破口となって、偏見や障害がすっと取り除かれ、考えがスムーズに進むことはよくあります。文芸批評家の小林秀雄に『考えるヒント』という著作がありますが、本書がめざしたのも、まさにつつましい「ヒント集」のような本です。

要するに、本書で言う「書くこと」や「考えること」はもっぱら、ふだん使いの読書や執筆や思考に関わるものです。つまり、僕はおおむね平生の「常識」に属する内容を、人文的な観点から語ろうとしています。したがって、それは、小説や哲学のような特殊なテクストを生産するときには当てはまりません。それどころか、小説や哲学書を書くには、むしろ「常識」を蹴り飛ばさないといけないとすら言える。そのことは必ず念頭に置いて

ください。

考える心のセットアップ

ともあれ、本書をあえて分類するならば、人文的な思考術を伝える「実用書」や「教養書」ということになるでしょう。僕としては本書が理解され、皆さんの日々の思考に役立つことを望んでいます。

ただ、ここで唐突に問うてみたいのですが「本が理解されて役に立つ」という現象も、不可解な謎を含んでいないでしょうか。例えば、戦後を代表する批評家の吉本隆明（よしもとたかあき）（「吉本ばななさんの父」と言ったほうが通りがよいかもしれませんが）は以前、次のような不思議な文章を書いたことがあります。

本には理解もできず、何の役に立つかもわからないのに、そのことで役に立つ本がある。また逆にとてもよく理解でき、役立ちそうなことがあちこちにばら撒かれてゐるのに、何の役にも立たない本がある。また本は中味で読みそうになつたらすぐに引き返して、そんなやり方で読んだら駄目だと、たえずつき崩し、茶々をいれて

いることで役立つ本もある。

この禅問答のような文章のなかで、吉本は書物というものの本質を鋭くついています。役に立たないようであり、役に立つ。いかにも理解しやすく役立ちそうなのに、実は全然役立たない。中身をまじめに読もうとすると、中身など実はないと主張してくる……こういう摩訶不思議なパラドックスが、確かに書物というメディアには常につきまわっています。その意味では、どんな本も実用書だと言えるし、逆に実用書などどこにも存在しないとも言えるわけです。

僕の経験則から言っても、小手先の技術をいかにも「実用的」なふりをして伝えたところで、あまり意味がない気がします。本書では多少の実践的なテクニックも紹介しましたが、それ以上に重点を置いたのは、人文的に考える心をセットアップするという、もう少し基礎的な作業です。それが本当に「理解され役立つ」かどうかは分かりませんが、それでも本書によって、人文的な教養にアクセスするときの障害が少しでも減ってくれれば、著者としてはうれしく思います。

〈参考文献〉

丸山真男 『後衛の位置から』（未來社、一九八二年）

吉本隆明 『言葉の沃野へ』（下巻、中公文庫、一九九六年）

目次

はじめに — 考える心のセットアップ 3

第一章 読書 — 読んで書くためのヒント 17

第二章 批評 — 考える《庭》を作る 53

第三章 言葉 — まずはニュートラルに話そう 93

第四章

近代

—— われわれはどんな時代に生きているか

129

第五章

歴史

—— 急所が分かれば十分

171

第六章

芸術

—— 「力」との接触

205

あとがき

243

付録ブックリスト 「二〇代の自分に読ませたい本」二〇選

245

第二章

読

書

— 読んで書くためのヒント

1 読むためのヒント

作品を「テキスト」として読む

ちょっとした考えるコツによって、思考の目詰まりを除去しつつ、人文的な考え方に読者を招待すること——それが本書の狙いです。この章ではもっぱら、僕が日頃学生にアドバイスしていることをもとに、読むこと・書くことに関わるヒントを記しておきましょう。

すでに述べましたが、僕は文学部で教員をしています。人文系の学問の根幹にあるのは「テキストを読む」という作業です。他者の書いたものを読み、じっくり考え、ときにはそれををもとに討議する——学生であれ教員であれ、このインプットとアウトプットの地道な往復を続けていくことが、人文系のトレーニングの基本中の基本です。野球選手で言えば、バットの素振りや筋トレのようなものです。

ところで、テキストとはもともと「織物」の意味です。フランスの高名な批評家ロラン・バルトは、一九六〇年代末から七〇年代にかけての評論で《作品》と《テキスト》を区別しました。作品がネットワークから切断された、いわばクロスドな状態の文書モデルだ

とすると、テキストはネットワークに対してオープンな状態の文書モデルです。テキストはさまざまなリンクの交差点であり、それが凝固したとき、作品としてのまとまりを成す——そういうイメージで考えるとよいでしょう。作品という「図」(Figure)の背後には、テキストという「地」(Ground)が広がっているわけです。

当時はまだインターネットはありませんでしたが、今では企業のポータルサイトも個人ブログもSNSのコミュニケーションも、すべてネットワークに組み込まれています。これらの文書は閉じたスタンドアローンの「作品」というよりは、相互接続された「テキスト」のモデルで考えたほうがよい。見た目はそれぞれ独立しているものの、実はさまざまな糸でつながっている文書が、われわれの周囲には満ち溢れています。ロラン・バルトはそのような新しい文書の世界の到来を予見していました。

この概念を使うと、一見してクローズドな「作品」に思えるものも、実はオープンな「テキスト」の性質をもつという見立てができます。いちばん分かりやすいのは、和歌でしょう。枕詞にせよ、掛詞にせよ、本歌取りにせよ、先行する表現のパターンを踏まえて「作品」を制作するテクニクです。和歌はまさに織物のように、先行する歌の記憶によって織り上げられているわけです。

「傾向と対策」が肝心

このような発想は、近現代の作品にも応用できます。作品はスタンダードアローンで独立しているように見えて、実は他の作品と潜在的に接続されている。このような相互接続のネットワークを想定すると、人文系の学問にも入りやすくになると思います。

文学や思想には興味があるが、どうも敷居が高くて気後れする——そういう先入観を取り去るには、その分野のネットワークに接続するというイメージをもてばよいのです。僕が学生にいつも言うことですが、だいたいどんな分野でも二〇冊くらい本を読めば、その分野で何が問題になっているかがぼんやりと見えてきます。

例えば、平成の三〇年間の文学について何か考えたい・書きたいと思ったら、まずは二〇冊ほど作品を選んで、かたっぱしから読みふけるのがよい（ただ、ジャンルや時代の幅は多少絞ったほうがやりやすいでしょう）。そうすると、ジャンルの景観が見えてくる。あえて受験用語を使うと「傾向と対策」が分かってきます。

むしろ、作家たちはそれぞれ独自のやり方で、独自の決意のもとに作品を書いています。しかし、不思議なことに、特に示しあわせた形跡もないのに、同時代の作家たちはお互いに似た作品を書いてしまうことがあります。こういう無意識の類似が積もり積もって、や

がてそのジャンルの傾向性を形作ることになる。このパターンが分かってくると、作品の読み方をもう一步進化させることができます。「ああ、最近よくあるタイプ的主人公だな」とか「これはパターンに属さないオリジナルな設定だな」という判断ができるようになるわけです。

作品どうしに「対話」させる

別の具体例をあげましょう。最近「ポストヒューマンの文学」をテーマに三年生向けの演習をしました。人間と人間以外のものとのコンタクトやコミュニケーションは、漫画やアニメから人工知能、パンデミックに到るまで、広範に見られるテーマですが、その想像力の原点に遡ろうという授業です。一九世紀から二〇世紀初頭にかけて書かれた古典的作品を手掛かりに、このテーマを考え直すという目標を立てました。

そのときは、ダルコ・スーヴィン『SFの変容』や丹治愛^{たんじ あい}『ドラキュラの世紀末』等を毎回教材として配布しつつ、メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』、ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』、H・G・ウェルズ『タイムマシン』と『宇宙戦争』、ブラム・ストーカー『ドラキュラ』、ジョゼフ・コンラッド『闇の奥』、カレル・チャペック『ロボット』、

アイザック・アシモフ『鋼鉄都市』を読解しました。これは半期の演習なので作品数が少ないですが、もう半期やれば、このテーマで卒論を書けるぐらいの知識は身につくでしょう。

演習の狙いは、これらの作品をまさに「テキスト」として相互接続することにあります。それによって、さまざまな問いが出力されます。例えば、同じくSFの古典と言っても、ヴェルヌとウェルズとでは何がどう違うのか。ウェルズ、ストーリーカー、コンラッドを「世紀末」のイギリスの作家として一望したとき、どういう共通項が見えてくるか。チャペックからアシモフへと進む過程で、ロボットの表象に何が追加され、何が脱落したのか……。作品どうしが互いに照らしあうことによって、人間以外の存在を扱う想像力のパターンが自然と浮かんできます。

これはいわば「作品どうしに対話させる」ということです。ある分野の固有名（作家名や作品名）をとりあえず二〇個程度インプットすると、それだけでこの対話を引き起こす「土俵」が浮かんできます。以前、横綱の白鵬はくほうがインタビューで「相撲をとっていると土俵がいろいろ教えてくれる」と言っていました。テキストのネットワークが緊密になっていくと、まさにその土俵がおのずと大切なことを教えてくれます。

ついでに言えば、文学系の大学院生ならば誰でもやっているでしょうが、古い作品を研究するときには、初出時の雑誌にあたるのが王道です。当該の小説がどんな作品と並び、そこにどんな広告が掲載され、どんな読者が想定されていたのかが、雑誌をめくると分かってくるからです。雑誌はまさに情報の宝庫であり、作品の属する「土俵」そのものです。

辞書はまめに引くべき

むろん、一つの作品をそれ自体として、徹底して読み込む作業もときには必要です。その訓練としてはやはり翻訳が適しています。

作家の大江健三郎さんは、翻訳をことのほか重視しています。彼は恩師のフランス文学者・渡辺一夫かずおによるピエール・ガスカールの小説の翻訳を例にとりながら、辞書をがっちり読んで原文と訳文を丹念に往復することが、いかに読む訓練として優れているかを説明しています。フランス語と日本語という二つの言語システムの「あいだ」で独自の文体を築き続けたという意味で、大江さんはまさに「テキスト」を生き抜いてきた作家です。彼にとって、読書や翻訳とは、著者の精神と深いレベルで同調すること、つまり著者が「かけがえない物事を発見する瞬間」に立ち会うことを意味していました。

残念ながら、僕は無精かつ不勉強なので、外国語とのこれほど濃密な精神的同調とは縁のない人生を送ってしまいました。ただ、大江さんが言うように、辞書が新しい言葉をもたらしてくれることは確かです。物書きは油断すると、いつも似た語彙ごいや言葉遣いで文章を構築しがちなので、言葉をたえず輸血しないと、文章も思考もすぐに貧血やこわばりを起こしてしまふ。だから、言葉の血液の補給源として、辞書をまめに利用すべきです。

後述するように、文章を書くときは「正確な言葉」の追求が欠かせません。そして、言葉の探索をするとき、いったん外国語に回り道することは非常に有益です。言葉がしつくりこないとか同じ言葉の反復が多いとか感じたら、その単語の英訳を辞書で引いてみる。すると、もつとしつくりくる別の日本語に出会えたり、その英単語の意味や語源から新たな着想が芽生えたりすることがよくあります。むしろ、日本語の類語辞典を引いてもよいのですが、僕は学生には英語と日本語の往復を推奨しています。そのほうが一つ一つの言葉への理解が深まるからです。

書けないのはインプットが足りないから

たまに「どうしても文章を書けない」という学生に出会いますが、それはたいい書く

技術というよりもインプットの量が足りないのです。乏しい情報でむりをしようとするから、すぐに行き詰まってしまふ。回り道に思えても、あらかじめ多めに素材をインプットしておく、おのずとその分野のパターンが浮かび上がり、的外れなことを書く危険が減ります。

結局、一から十まで独力で書こうとするから、袋小路に入り込んでしまふ。むしろ対象が自分から語り始め、作品たちがにぎやかに「対話」を始めるくらいに、量的なインプットを焦らず増やしておく。つまり、土俵に考えてもらおう。「書くこと」は自己とテクニクのコラボレーションであると考えれば、心の負担が少しは軽くなるのではないだろうか。

そのインプットの起点となるのは、やはり図書館や書店です。僕が必ず新入生に言うのは「図書館や書店では、本だけではなく本棚を見よ」ということです。図書館であれ書店であれ「お目当ての本を入手してそれで終わり」というのでは、あまり意味がありません。なぜなら、自分にとって本当に役立つ本は、往々にしてお目当ての本の「隣」にあったりするからです。検索→入手という効率的な早道を通らずに、まずは本棚そのものと向き合ってみる。本棚とは偶発的な出会いの場だと考えてください。

図書館であれば、だいたい同じ分野の本がずらっと棚に並んでいます。少しでも気にな

った本は、とりあえず書架から出してみる。一〇冊くらい選んで机にどんと積んで、パラとめくってみましょう。どうせ集中力は続かないので、一冊の本にそれほど時間はかけなくて構わない。流し読み程度でも、ある分野に登場するキーパーソンやキーワード、テーマや課題はおぼろげにつかめます。後で言うように、こういう「メタデータ」の収集はたいへん重要です。

パースペクティヴを獲得する

もう一つ、インプットの仕方としては、特定の書き手のファンになるという道があります。僕の場合、大学三年生のときに、アメリカ同時多発テロ事件のショックも冷めやらないなか、たまたま村上龍さんの対談集『存在の耐えがたきサルサ』を読んで、初めて批評家の柄谷行人からたこうじんさんや浅田彰あさだあきらさんや蓮實重彦はすみしげひこさんたちの名前を知りました。特に、柄谷さんには心酔して、著作をかたっぱしから読みました。

すると、柄谷さんの本だけではなく、彼が言及する作家や思想家も読みたくなって、自然とあれこれ本に手を伸ばすようになる。僕を後に『波状言論』という先鋭なメルマガジンでデビューさせてくれた東浩紀あずまひろきさんの著作に出会ったのは、それがきっかけです。今

にして思うと、大学の三年生から四年生が、いちばん読書の楽しい時間でした。それまでまったく知らなかった知的な世界が、突然目の前に現れたのですから。何を読んでも面白いという幸福な時期でした。

特定の書き手の文章を集中して読む利点は、パースペクティブ（視点）を得られるということです。行き当たりばったりに本を読もうとすると、どうしても書物の膨大さを前にしてフリーズしてしまう。それよりは、しっかりした書き手の「視点」で選択され参照されたテキストを、数珠つなぎ式に読んでいくのがよいでしょう。

パースペクティブの獲得は、読書だけではなく思考の鍛錬にも役立ちます。学生時代の僕は、柄谷さんや東さんならば、この作品やこの現象についてどう述べるだろうか、無い知恵を絞って必死に考えていました。こういうシミュレーションを続けているうちに、だんだん批評家の思考パターンが分かってきて、自分でも何か書きたくなってくる。いわゆる「知的生産」は、特定のパースペクティブをインストールするところから始まります。その意味では、一編の文章や一人の書き手を、効率性を度外視して徹底して味わい尽くすという経験も、やはりどこかで必要です。

ちなみに、今は「ブックガイド」が山のように出版されていますが、その効果について

僕は懐疑的です。それよりは、しっかりしたパースペクティヴを備えた書き手の著作を基準点として、その参照先まで数珠つなぎ式に読み進めるほうが、テキストのネットワークの深部に入り込めるのではないか。優れた著作は、それ自体が最良のブックガイドです（…と言いつつ参考までに、本書巻末にブックガイドを添付しておきました）。

本はノンリニアなものである

このように、インプットの工夫はいろいろあります。ただ、読書そのものがしんどかったり、尻込みしたりするケースもあるでしょう。その場合、どうすればよいでしょうか。

大前提として、無理して本を読む必要はまったくありません。なぜなら、読書は人間の本能とは何の関係もないからです。識字率が低かった時代は、たいいてい人間は本を読まずに一生を送り、それでも人類の文化は維持されました。読書が苦手なのは、いたって自然なことだし、読書以外に楽しいことはいくらでもあります。僕は職業柄、本を比較的多く読んでいますが、別の仕事に就いていたら、ほとんど読まなかった可能性は大いにあります。

それに、読書することが一概に望ましいとも言えません。例えば、一八世紀フランスの

思想家ルソーは、社交界にはびこる文学や哲学のせいで人間が都市文明に汚染され、本来的なあり方を喪失してしまったと見なしました。僕自身、ルソーほど極端な文明否定論者ではないにせよ、自宅の本の山を眺めていると、とても不自由かつ不自然な気がしてうんざりしてきます。できれば本を読まずにものを考えたいと、常々願っています。

それはそれとして、たくさん本を読みたい（あるいは仕事や学業のために読まねばならない）、それでも思ったようにいかない、そういうもどかしい気持ちの読者はいるはずで、そんな読者のために、いちばん重要な考え方を標語にまとめましょう。

本は非線形（ノンリニア）な道具箱である。

本をリニア（線形）なものとして捉えるか、ノンリニア（非線形）なものとして捉えるか。これは大きな違いです。結論から言えば、読者は「ノンリニアな道具箱」としての書物に接すればよいのです。

アイテムを拾うように読む

たいていの物書きが同意すると思いますが、本はそもそも、最初から最後までリニア（まっすぐ）に読み通す必要はありません。冒頭から順番に読む必要もありません。順を追って、律儀に読み進まねばならないという思い込みは、ここで捨ててください。

そもそも、本とは適当に拾い読みするくらいでも、十分に役立つものです。長年経験を積んでくると、三〇秒ほどパラパラとページをめくれば、その本が自分にとって必要かどうかの判断はつきます。そして、必要だと判断したら、とりあえず最初から最後までページをめくってみます。

その速度は一定でなくてもよい。読んでいて面白いときは、じっくり腰を据えますし、そうでないときは速読です。それは「ながら」でも大丈夫。僕の場合、片方の手で家の二歳児の相手をしながら、もう片方の手で一冊読み終わるのに、本の種類にもよりますがだいたい三〇分未満です。

なぜそうできるかというと、文字通り「拾い読み」しているからです。本というのは、目分量で言えば四、五ページに一箇所くらい、それなりに重要なポイントが出てくる。そこをペンでマークしたり、ドッグイアをつけたりする。ゲームで言えば、フィールド上の

アイテムを拾い上げていく要領で、ページを視覚的に一望し、そこから要点を拾ってチェックする。その際にひらめいたことは、そのページや本の扉に簡単にメモします。

そのとき、本の全体を把握する必要はありません。論旨をそこまで厳密に追わずに（もちろん追ってもよいですが）、むしろアイテムらしきものにパツパツと印をつけていく。ただ、重要な情報が急に出てくるケースもあるので、速読のときほど眼のセンサーの感をあげたほうがよいでしょう。どのみち、自分にとって重要な本ならば再読することになりますから、見逃したアイテムはそのとき拾えばよいというスタンスでも構いません。

念のために言えば、早く読めるから偉いということはありません。一言一句もゆるがせにしない学究的な読み方も、僕はまったく否定しません。ただ、読書を重々しく崇高な労働のように捉えるのは、たんにナンセンスでしょう。どれだけ偉い著者も、所詮われわれと同じ人間にすぎない。そう割り切って、僕は本と付きあっています。

本は「改造」されるべきもの

もう一つ、読書において肝心なのは、すべてをまんべんなく理解しようと思わないことです。一冊の本のなかに、分かったような分からないような、あいまいなグレーゾーンが

あるのは当然です。しかし、そこで引つかからずに、とりあえず最後まで読み進めてみる。その後でグレーな箇所に戻ると、意外にすんなり理解できることも多いのです。

要するに、理解はしばしば遅れてやってくる。一冊の本のなかにも、理解の時差があると考えてください。分かるから○、分からないから×という単純なものではありません。

それに、一冊の本から得られる情報は、恐らくそれほど多くありません。一概には言えません。僕はおおむね二つか三つの新しい認識を得られれば十分——それくらいの歩留まりで考えています。あまり多くのことを一冊の本から吸収しようとしても、頭脳がパンクするだけです。

ただ、その必要最低限の「二つか三つ」（四つか五つでもよいのですが）のお土産をしつかりとつかんで、随時取り出せるようにしておかないと、読書から得られることはあまりありません。漫然と読み終わって、中身をすっかり忘れてしまつては、たいして意味はないでしょう。

では、どうやって「つかむ」のがよいでしょうか。几帳面な読者は、実際にカードを作つて保存するかもしれません。僕も学生時代にはそのようなカード作りに挑戦しましたが、結局長続きしませんでした。このようなやり方には、性格的な向き不向きがあります。

試行錯誤の結果、今では本の扉のところに、その本のキーワードや個人的な思いつきを適当に書き散らすようになりました。いずれ本格的にその本を使うことになったとき、アイデアを追跡し「復元」できるようにマークやタグをつけておくわけです。本がデータだとすると、個人的索引としてのマークやタグはメタデータ。メタデータの目印さえあれば、執筆の際にも十分役立つことに経験則で気づいたのです。

哲学者のジル・ドゥルーズ&フェリックス・ガタリは、書物とは「外」にはたらしきかける小さな道具」のようなものだと言っています。本とは冒頭からリニアに読み解くべきものではなく、そのつど必要に応じて内容を取り出せる、ノンリニアの道具箱です。ただ、道具箱がぐちゃぐちゃだと使いにくい。だから「この本にはこんな道具が入っていますよ」というタグ⇨メタデータの表示が欠かせません。コンビニやスーパーと同じで、商品の管理はちゃんとしないと、すぐに取り出せなくなってしまう。だから、メタデータの書き込みによって、本を機能的な道具箱に改造してしまえばよいのです。

純粹な積読は無意味

ついでに言う、いわゆる「積読」^{つんどく}はあまり意味がありません。より正確に言えば、積

んでもよいのです。しかし、積む前に二、三分で構わないから、パラパラとめくってください。それだけで、その本にどういう内容が書いてあるのか、ある程度把握できます。本の詳しい内容⇨データは、いつか時間のあるときにじっくり読み解けばよい。しかし、だいたいどういう本なのかというメタデータは、本を手にしたらすぐに把握するべきです。

というのも、その最低限の情報があれば、後々「そういえば、あの本に必要な情報らしきものを書いてあったな」と思いつくことがあるからです。逆に、この二、三分の手間を惜しむと、本はずっと本体が分からないまま、無意味に積んだままになりかねません。何事もそうですが、0と1のあいだには無限の差があります。1をインプットしておけば、それを2や3に発展させることは簡単です。しかし、0はいつまで経っても0。純粹な積読が無意味なのは、そういう理由です。

いずれにせよ、読書においては「パラパラめくる」という素朴なテクニックが、たいへん有効です。というのも、本の具体的なデータもさることながら、まずは「その本がどういうテーマの本なのか」「どんな思想家や文献が参照されているのか」というメタデータが重要だからです。メタデータはいい加減なパラパラ読みでも十分入手できる。その小さな手間を惜しんではいけません。

本を役割別に「仕分け」する

むろん、こういうメタデータから入る読書のやり方には、限界もあります。例えば、卒論で谷川俊太郎論を書くこうと思うならば、まずはやはり谷川の書いた詩（≡データ）を何度も徹底して読み込まねばなりません。つまり、独立した「作品」と向きあつて、その言葉の一つ一つから何かを持ち帰らないといけない。

ただ、その場合でも、頭からリニアに全部理解してやるぞと力こぶを入れると、かえつて挫折することもあります。まずパラパラめくつて、だいたいどんなキーワードが出てくるのか、どういう気分や文体で書かれているのかを視覚的・直観的に把握する。面白そうなページがあれば、そこから読んでもよい。ノンリニアなつまみ食い続けるうちに、本の全体像がつかめてくる——これは決して不真面目な読書ではありません。

それゆえ、読書の前に、本の「仕分け」をするとよいでしょう。精読せねばならないメインディッシュの本なのか、今の仕事に調味的に加えたい程度の本なのか、将来的にレシピに加えたい本なのか、それとも純粹に楽しみのための読書なのか。簡単な「あたり」をつけることを推奨します（むろん、読んでいるうちにメインディッシュに昇格する本もよくあります）。ということとは、読書する前に、実は半分読書は始まっているわけです。

紙の書籍のメリット

このように、物理的な紙の本は、実はかなり融通のきくメディアです。個人的索引をつけたり書き込んだりという「改造」もしやすいし、パラパラめくってメタ情報を得るのも容易です。

逆に、僕にとって電子書籍が不自由なのは、こういう「改造」や「パラ見」がやりにくいことに尽きます。確かに指で高速でスクロールすれば、それに近いことはできる。しかし、紙をめぐることに比べれば、圧倒的に遅いし、読みにくい。一般的な通念とは逆かも知れませんが、僕の考えでは、電子書籍はかなりリニアな進行に縛られています。

むしろ、電子書籍が一概にダメとは思いません。例えば、漫画であれば、僕でもたいしてストレスなく読んでいけます。それは、漫画をノンリニアに読む意味があまりないからです。あるいは学校の教科書にしても、すべてを電子化すると弊害がありそうですが、視聴覚機能の充実した電子教材を部分的に取り入れるのは、悪くないと思います。

ただ、これは僕だけかもしれません。電子書籍はなぜか記憶に残りません。電子書籍で買っても、買ったことそのものをよく忘れてしまいます。こうなると、お金と時間を無駄にしただけではないでしょうか。本がモノとして存在し、自己のありかを静かに主張し

ていることは、それ自体が記憶であり情報の一部だと僕には思えます。

2 書くためのヒント

粗雑さは精神の敵

ここまで「読むこと」に関わる問題を整理してきました。では、書く側の論理についてはどうでしょうか。

僕は「本はノンリニアな道具箱である」と繰り返してきました。ただ、それはあくまで読む側に立った話です。書く側になったときは、否が応でもリニアな構築が要求されます。書く側がきつちりとストーリーやコンセプトを設定し、テキストを組み立てるからこそ、読む側はそれを道具箱として自由に使えるわけです。書く側までノンリニアになってしまふのは、たんなる甘えや怠惰にすぎません。書き手には「構築する力」が絶対に必要です。わざわざこういうことを言うのは、とりわけ東日本大震災以降、ずいぶんと「雑」なつ

くりの本が目立つからです。具体名は出しませんが、妙にくだけた談話調にして読者の気を引こうとしたり、些末さまつなテーマを大仰な「心の叫び」のように語ったり……。そういう本が妙に売れたりするので困りますが、しかし、それは内輪受けを狙った浅はかなパフォーマンスにすぎません。書き手と受け手の心と頭脳がどんどん雑になっていくだけで、何も良いことはない。粗雑さは精神の敵です。

文章を丁寧ていねいに、細心の注意を払って組み立てる——これはプロの作家からレポートを書く学生まで、あらゆる書き手が共有すべき最低限のノルマ（規範）です。もとより「丁寧に」というのは「鈍重どんじゆうに」ということとは違います。文章にリズムやスピード感が必要ですから、文章の流れを停滞させるような鈍重さは要りません。文章の隅々まで意識を行き渡らせて、その「仕立て」を改善し続ける。「これでいいや」と投げやりな書き方をしない。感覚の鋭さや注意深さを文章に染み込ませる——丁寧に書くとはそういうことです。

文章の基本はパラグラフ・ライティング

リニアな展開を意識しつつ、文章を丁寧に組織的に書く。それは「論理の流れを鮮明にする」ということです。そのためには、流れを見えやすくする工夫が必要です。

僕が学生にライティングを教えるときには、何よりもまず「パラグラフ・ライティング」を徹底するように指導します。詳細は戸田^と山^や和久^{まか}さんの『論文の教室』等を読んでもらえばよいですが、ポイントは①段落の冒頭にその段落の内容を端的に示す「トピック」を置くこと、②一つの段落に複数のトピックを入れないこと、③先頭のトピックの文以外の文は、トピックを補完するサブとして扱うこと、この三点です。

この書き方がちゃんとしていると、パラグラフの先頭の文章だけ読んでいくだけで、それなりに論旨がつかめます。書き手にとっても、文章の視認性が高まるのでミスが減る。記述の分量や順序についても判断がつきやすくなります。「このパラグラフを成立させるには、もうちょっと文章が要るな」とか「このパラグラフと次のパラグラフは入れ替えたほうがスムーズだな」とか、編集的な調整が容易になるわけです。

僕の場合、書きたいことがなくて困るという経験はほとんどありません。どちらかと言うと、いくつかの書くべきトピックを、本や論考のどこに配置するのが最も適切で効果的かを考えることに、時間を費やしています。つまり、書くことは半ば編集の問題になります。だからこそ、パラグラフには非常に気を遣っています。

ミス減らすための音読

パラグラフをちゃんと区切れるかどうかは、文章の良し悪しを判定する試金石となります。段落がほとんどない、まるで一枚の板のような著しく視認性の低い学生のレポートは、見ただけで採点する気持ちが失せますし、実際そういう文章は小さなミスも多い。これはスマホで文章を書いているからでしょう。別にスマホで書いてもよいのですが、その場合はパラグラフ・ライティングができていないかを、いつも以上に念入りに確認してください。

ちなみにミスを減らすということ言えば、僕は学生に、ある程度書き慣れるまでは、レポートを提出する前に文章を「音読」するようにアドバイスしています。音読するだけで、誤字脱字を含めた細かい不備に気づくし、文章のリズムの悪さや論理のつながりの間題点も自覚できるからです。僕も自分の文章を声には出しませんが、必ず頭のなかで音声に変換しながら書いています。パラグラフ・ライティングや音読によって、書くことを視聴覚的作業に変換する——これが文章上達の早道でしょう。

書評欄のフォーマットで書く

ところで、パラグラフを単位として書くというのは、ユニットを構築しながら書くとい

うことと同じです。いきなり長大な文章をひとつなぎに書くのではなく、ユニットを組み合わせ、レンガを積むようにして文章を書く。戸田山和久さんも言うように、文章とはパラグラフの集合住宅です。一つ一つの部品⇨パラグラフをきちつと責任をもって組み立てていけば、それなりにちゃんとした家はできあがります。

昔から、思考をあらかじめ多量のカードにしてしまつて、それを論文のテーマに応じて随時配列するという書き手はいました。ドイツの社会学者ニクラス・ルーマンは、数万枚に及ぶカードにアイデアを記し、それらをリンクさせて論文や著作を書いていたようです。むしろ、パラグラフ・ライティングとはまったく意味が違いますが、思考をカード化するというのはユニット化することと近いように思います。

このユニット化のコツを実践的につかむために、僕はライティングの授業では必ず、新聞の書評欄のフォーマットで書評を書いてもらいます。文字数のかせをはめながら、本のエッセンスを必要十分な記述によつて、偏見をまじえることなくきちつと段落を区切つて書く。それがちゃんとできれば、長いレポートにも十分に応用がきくからです。

もとより、書評とは評論ジャーナリズムの基本中の基本です。かつ、書評ならば、ちょっと訓練すれば誰にでも書けます（ときどき「プロの書評家」なる書き手が妙な特権意識をも

って高圧的に振る舞ったりしているようですが、恥ずかしいことです。むろん、誰でも書けるから簡単というわけではなく、書評にはそれ固有の難しさがある。だからこそ、多くの人間が良質の書評を書けることは、文化の成熟度を測る物差しになり得るでしょう。今は新聞の書評欄のレベルも総じて下がっていますが、本のエッセンスを的確につかんで、読者に伝達するという営みがないと、文化はすぐに荒廃してしまいます。そういう意味でも、ライティングの訓練としての書評は重要です。

ユニット化は会話にも役立つ

さらに、こういうユニット化の心がけをもっていると、執筆だけではなく会話にも利益があります。僕は対談に臨むときは、話題になりそうなキーワードやフレーズをいくつか、事前にメモっておきます。後は話の流れにあわせてキーワードを選び出し、適宜頭のなかで言葉を足してユニットを作る。対談中も、相手の発した気になるワードを記憶しておいて、自分のターンになったらそのワードを起点に一つのユニットを構築する。そういう意識でやっています。

その意味で、僕は純粋な即興でしゃべることはあまりありません。というより、何も事

前準備のない即興というのは、ほとんどあり得ないと思います。ジャズのインプロヴィゼーション（即興演奏）にしても、音楽的な約束事やフレーズがちゃんとあるからこそ、それらを即興的に組み合わせて、まともなパフォーマンスに仕上げられるわけです。熟練のジャズ・ミュージシャンも、コードのない純粋なカオスのなかで演奏することは無理でしょう。

論理立てて話しつつ、ときに当意即妙のアドリブも利かせるといえるのは、ユニット化・コード化の意識があるからこそ可能なのです。逆に、ただだらと思いつくままに、締まりなくしゃべっている人は、ユニット化の意識が乏しい。それは常日頃から、ものごとを構築的に考えていないからです。むしろ、会話において瞬時にユニットを組み立てるのには慣れが要りますが、その心がけをもつともたないとは、大違いです。

適切な言葉Ⅱ主人公を選ぶ

さて、僕はさつき「書くことは自己とテキストのコラボレーション」だと言いました。このコラボレーションをうまく進めるためには、それにふさわしい主人公を選ばねばなりません。論説文やレポートの場合、主人公は当然「言葉」になります。主人公がダサイと

物語は冴えません。それと同じく、正確な言葉＝主人公を選ぶことこそが、論説やレポートの鍵になります。

一例をあげましょう。ある学生が「近年のアニメにおける他者志向性の是非」という題でレポートを書こうとしていました。彼が考えたかったのは「自分より他人を優先すること」は是非かというテーマです（たぶん『鬼滅の刃』が念頭にあったのでしょう）。さて、皆さんならば「他人を優先する生き方」を言い表すのに、どのような言葉を用いるでしょうか。

やはり「他者志向性」は妙です。それは「利他性」と言わねばなりません。そして、利他性という適切な主人公が見つければ、後はそのキーワードに導かれるようにして、さまざまな切り口が見つかります。例えば、利他性の対義語は「利己性」です。学生のテーマを裏返して、まずは「利己的な振る舞いとはどういうものか」を考えてみてはどうか。あるいは、利他性と利己性をそう簡単に切り分けられるか、改めて吟味してみてはどうか。そもそも、利他性の起源はどこにあるのか。等々。

良い言葉がパズルのピースとして見つかると、まさに「自己とテキストのコラボレーション」がスムーズに進む実感をもてます。それは自分が書くのではなく、言葉が書くと感じ

じられる状態です。書くのは基本的には地味で面倒な作業ですが、このピースがはまるときだけは独特の快感があります。逆に、正確な言葉が見つからないと、文章は停滞し冴えないものになってしまいます（先述したように、英語の辞書を使うのは、言葉の探索にたいへん役立ちます）。

結局、書くというのは、言葉をよりふさわしいものに修正し続けるプロセスです。これは時間と労力を要します。学生だけではなくプロの書き手にとっても、あれでもない、これでもないと言葉の迷宮をさまようのは、ときに苦痛でしょう。しかし、この難所でこそ、丁寧で粘り強い思考が要求される。じっくりくる言葉を見つけるのに数日悩むこともあります。ですが、この苦労を省略すると、精神的にも技術的にも成長しません。

要するに「このへんでいいや」と雑に乗り切ってしまうのでは、考えたことにならないのです。さっき「粗雑さは精神の敵」と言ったのは、まさにそのためです。ものごとを雑に処理している限り、思考の真似事の先には進めない。考えるとは、頭脳に日常とは違う負荷をかけることです。

思考の筋力を落とさないために

ここまで技術的なテーマについて述べてきました。まとめると、①情報を多めにインプットし、②そこからその分野に固有の問題やパターンを抽出し、③思考のユニットを構築し、④より正確な言葉を探索し続ける。この一連の手続きを粘り強くやっていくことが、知的生産性を保つ基本だと思います。

ちなみに、僕自身は一般企業に正社員として勤めた経験はありませんが、以上のプロセスは社会人の仕事にも応用がきくでしょう。なぜなら、上記の手続きは、情報処理の基本だからです。文学部の学問は一見すると、浮世離れしているように見えますが、必ずしもそうではない。企業が社会という不透明なものと向きあいながら商品やサービスを提供するように、文系の学問はテキストという不透明なものを糧かてに、文章をアウトプットする。この両者は構造的に似ていると思います。

ただ、書き手にとって最終的に重要なのは、あまりにも凡庸な言い方になります。結局モチベーションです。ものを書くのはきわめて労多く地味な作業です。しかし、この面倒くさい仕事を持続しなければ、いつまで経っても作品はできあがりません。

しかも、アスリートと同じで、現役選手でいるためには基本的なトレーニングを繰り返

さなければなりません。書くトレーニングをさぼるとあつという間にダメになる。どれだけ面倒でも一所懸命に文章を書き続けていないと、思考の筋力や握力はきめんに落ちてしまいます。「あれだけ頭の良い人でも、思考の筋肉が弱るとこうなるのか」と残念に感じることが、短文で影響力を発揮できてしまうSNSが普及してから、かなり増えました。

関心をにじませる

物書きにとって、意欲の枯渇は珍しいことではありません。知的好奇心を持続させ、モチベーションを保つには、各人の工夫が要ります。

僕のやり方を、ちょっとだけ紹介しましょう。仕事で読書する必要があるとき、僕は時間之余裕のある限り、いつも余分に情報を仕入れることを心がけています。例えば、対談の仕事があるとき、そこで話題の中心になりそうな情報を網羅的にインプットしておくのは当然として、すぐには使わないかもしれない関連資料にも、ついでに眼を通しておくだけです。

言い換えれば、わざと関心を「にじませる」ということです。あるテーマのへりの部分まで、余分に勉強しておく。すると、それが次の仕事に役立つことがよくあります。すぐ

に役立つ情報ではなく、遅効性の情報をインプットの作業のなかに組み込んでおくのが、枯渴を避けるコツです。

こういう「関心のにじみ」を心がけていると、いつも五つか六つくらい、考えるべき主要なセクションを保てることになります。むしろ、一度にすべての分野については書けないので、順々にやっていくわけですが、セクションを複数もっていると、ときどき生産的なキアスム（交差）が発生することがあります。テーマAについて調べているうちに、テーマBを考えるのに役立つ文献が見つかることは珍しくない。現に、僕はある連載の下準備をしています。そこで得た情報が本書を書くのにかなり役立ちました。こういう交差こそが「関心のにじみ」の効用です。

さらに、本書は例外ですが、一冊の本を書くときには、やはり一〇〇冊から二〇〇冊くらいはまとめて本を読むべきでしょう（部屋が本だらけになるので、妻にはいつも呆れられますが）。最低それくらい材料を入れないと、味にコクが出ず、パターン化された議論の焼き直しになってしまう。一〇〇冊以上の投資をしておけば、将来的にキアスムも生まれやすいのです。

もとより、今、直面している仕事をきちんとやるのは当然です。より重要なのは、二手

先、三手先を見据えて、意識的な「仕込み」を常日頃からやっておくことです。そういう余白がないと、意欲はあつという間に干からびてしまう。これは物書きに限らず、だいたいどんな仕事にも共通しているのではないのでしょうか。

内的な衝迫がないと続かない

…と言いつつ、こういう技術的な工夫だけで「書くこと」を持続させるのも、実は困難です。いきなり精神論になって恐縮ですが、内的な衝迫がないと、書く力は湧いてきません。誰に何と言われようと、ほかならぬ自分が書かねばならないというファイティング・スピリット（あるいは勘違い？）が核にないと、書き手であり続けることはできません。

出版やメディアでは、一時的に注目を集める新人の書き手がたえず出てきます。しかし、あえて偉そうなことを言いますが、そのうちのほとんどはたぶん一〇年も書き続けることはできないと思います。一つは、たいていの書き手が不勉強だからです。もう一つは、承認欲求が強い反面、内的な衝迫が希薄だからです。知・情・意が備わっていないと、ものを書くという面倒でしんどい作業をやり抜くことはできません。

一〇年間、文章の質を落とさず、マンネリ化もせず、コンスタントに書き続けるのは、

想像以上にきついことです。この厳しさを、「いま話題の著者」に群がることの得意な最近の編集者たちはろくに分かつていないのではないかとよく感じます。

率直に書く

本章は読書術から始まって、精神論へと進んでいきました。最後はちよつと説教臭くてウザかったでしょうか。しかし、読んだり書いたりする小手先の技術だけが身につけても、あまり意味がないのです。結局のところ、われわれはなぜ書くのか。この問題について、かつて作家の中野重治なかのしげはるは次のように記していました。

話すこと、書くことは、人が自分をたしかめ、他人とのふれあいあひだで自分をたしかめ、他人をもたしかめて行く仕方である。これは、ひとりごとの場合でも、他人に見せぬ日記とか覚え帳とかいうものの場合でも、すべてそうである。それだから、話すにはどう話すか、書くにはどう書くかを研究することは、人間として自分をたしかめ、他人をたしかめ、それによつて自分が正しく行動し、他人と組んで正しく行動し、こうして人間としてたしかかな生活をして行く行き方を研究する

ことである。話し方の手本とか、手紙の書き方の手本とかいうものが、昔からたえず出ているのも、こういう手近な、しかし真実な原因からくるものとわたしは思う。

このような認識は、一見して古臭いようである、かえって新鮮です。中野が言うように、書くことはまさに「自分をたしかめ、他人をたしかめる」ための方法です。自分が世界をどう感受し、ものごとをどう思考し、他者とどう付きあい、日々どのように行動しているのか——それを検証し修正するための手続きが「書く」ということです。したがって、文章を粗雑に書くのは「自分」も「他人」も粗末に扱うことと同じです。

そもそも、ものを書くというのは、大なり小なり恥をかくということですから。それでも「自分をたしかめ、他人をたしかめる」ためには、どうしてもその恥の多い作業を経なければならぬ。そして、その確認作業の副産物として、ときに社会や文化を改善できるようなミーム（文化的遺伝子）が作成できることもある。そう信じて、僕は仕事を続けています。すでに恥をかいているのだから、後は率直に書くべきです。「自分をたしかめ、他人をたしかめる」ことは、あくまで率直な態度でなされねばならない。ごまかさな。権力にお

もねらない。勝ち馬に乗ろうとしない。忖度しない。書き手の倫理は、煎じ詰めればそれです。

〈参考文献〉

ロラン・バルト「作品からテキストへ」『物語の構造分析』（花輪光訳、みすず書房、一九七九年）

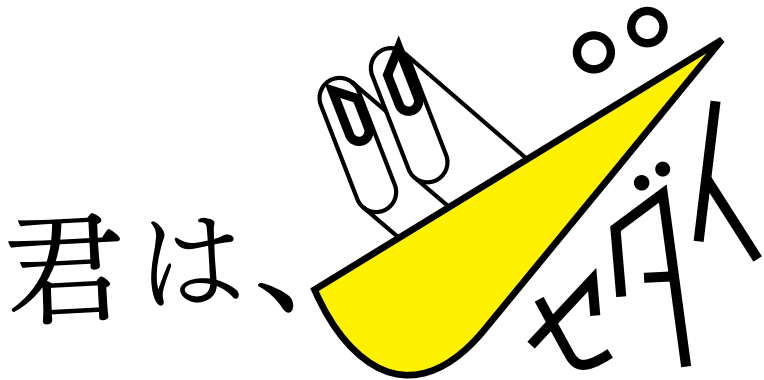
大江健三郎『読む人間』（集英社文庫、二〇一一年）

ロバート・ダーントン「読者がルソーに応える」『猫の大虐殺』（海保真夫＋鷺見洋一訳、岩波現代文庫、二〇〇七年）

ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ『リゾーム：序』（豊崎光一訳・編、朝日出版社、一九八七年）

戸田山和久『新版 論文の教室』（NHKブックス、二〇一二年）

中野重治『「話すことと書くこと」まえがき』『中野重治全集』（第二巻、筑摩書房、定本版、一九九八年）



君は、
何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!